

監修

高木市之助
山岸德平

久松潜一
小島吉雄

新訂
平家物語
下

富倉徳次郎校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

富倉德次郎（とみくらとくじらう）
明治三十三年東京生。大正十五年
京都大學國文學科卒業。文學博士。
駒澤大學教授。主著「平家物語研
究、卜部叢好、風物帖、とはずが
たり、平家物語全注釋等。

日本古典全書

「訂平家物語」下 富倉德次郎校註

昭和二十四年二月十月初版發行

昭和四十五年七月十五日新訂初版發行

昭和四十八年十月一日第四刷發行

印刷所 凸版印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田區

有樂町・大阪市北區中之島・北九

州市小倉區砂津・名古屋市中區榮）

定價 六二〇圓

目次

凡例.....三

本文.....七

平家物語卷第十.....七

類 渡.....七

内裡女房.....三

院宣請文.....五

戒 文.....五

海道下.....三

千 手.....三

横 笛.....四

平家物語卷第十一.....六

逆 櫓.....六

大坂越.....六

八嶋軍.....六

扇.....六

弓 流.....九

高野卷.....四

維盛出家.....五

熊野參詣.....五

入 水.....五

三日平氏.....五

付池大納言關東下向.....六

藤 戸.....六

志度浦合戰.....一〇

壇浦合戰.....一〇

先帝身投.....一一

能登殿最後.....一二

内侍所都入.....一二

劍……………三七

副將誅……………一四〇

大臣殿被渡……………三三

腰越……………一四〇

鏡……………三三

大臣殿誅……………一四〇

文沙汰……………三六

平家物語卷第十二……………一五

重衡誅……………一五

判官都落……………一五

大地震……………一五

六代……………一六

平大納言被流……………一五

六代誅……………一八

土佐房誅……………二七

平家灌頂卷……………二二

大原入……………二二

六道……………二二

大原御幸……………二七

附錄……………三三

堂供養……………三三

延喜聖代……………三三

願文……………三三

平家物語年表……………四〇

平家物語參考系圖……………四一

平家物語參考地圖……………四六

新訂

平家物語
下

富倉徳次郎

凡 例

一、本文は米澤圖書館藏、舊林泉文庫藏の「平家物語」を底本とした。そして底本は漢字主體平假名交り文である。いまこれと同系統の寫本にして平假名書きである京都府立圖書館藏の「葉子十行本」及び沼澤龍雄舊藏（現在駒澤大學圖書館藏本）の「葉子十行本」を參照して校訂した。

一、本文は忠實に底本によることとしたが、明らかに誤寫誤傳と考へられるものは、前記「葉子十行本」を初め、「平家物語」の諸傳本、「屋代本」・「平松家藏古寫本」・「覺一本」・「覺一別本」・「中院本」・「城方本」・「百二十句本」・「城一本」・「時房本」・「流布本」・「四部合戰狀本」・「長門本」・「延慶本」・「源平盛衰記」等を參照して改めた。なほ傳本名中、略號を用ゐたが、「京本」とあるは、京都府立圖書館藏「葉子十行本」のことであり、「沼本」とあるは、沼澤龍雄舊藏「葉子十行本」のことである。

一、底本は漢字主體平假名交り文であるが、そのうち、假名を漢字に改め、漢字を假名に改め、送假名を統一し、句讀點を附すなど、總て讀み易きを期した。また底本には振假名はないが、いまこれをも加へた。振假名については、前記の「葉子十行本」によるところが多いが、また「波多野流墨譜本」・「平家正節」・「前田流墨譜本」も參照した。

一、底本の用字はなるべくそのままとしたが、読み易いやうに、左記の如きものはこれを改めた。括弧内は改訂したものである。

余多（數多） 生取（生捕） 忪（疑） 威（威） 鬼海が嶋（鬼界が嶋） 打手（討手） 打死（討死）
 胡敵（胡狄） 事つて（言傳） 紫震（紫宸） 鹽（潮） 人王（人皇） 勢兵（精兵） 高間原（高天原）
 高御藏（高御座） 勅定（勅詮） 兵物（兵） 天王（天皇） なか半（半） 女姓（女性） 莫太（莫大）
 先さき（眞先） 身なし子（孤子） 宮子（都） 王子（皇子） うけ給はる（承る） 在まし（おはしまし）
 給ふ（動詞）（賜ふ） 楯籠り（立籠り） の給ふ（動詞）（宜ふ） 伏す（復す） 慥み（揉み）
 淺猿（あさまし） 跡無姿（あとかたなき） 難在（有難し） 糸惜し（いとほし） 影謹（うしろめたし）
 疎々敷（うとうとしく） 浦山敷（うらやましう） 長無（おとなしう） 緩（夥し） 心ざし（志斗）
 （ばかり） 無本意しは（本意なかりしは） 無止事（やむことなし） 床敷（ゆかしく） 良（やや）
 覽（助動詞）（らん） 去程に（さる程に） 哉（助詞）（や・かな）
 などの類。

また假名遣ひも、次のやうなものは括弧内のやうに改めた。

あはて（あわて） いとおし（いとほし） をく（置く）（おく） をくり（送り）（おくり） をくる（運る）（おくる） おし（押し）（おし） おしく（惜しく）（をしく） をしはかられて（推し量られて） を

それ(おそれ) をそろし(おそろし) おとし(落し)(おとし) をどろかす(おどろかす) をのを
の(おのおの) おのこ(男)(をのこ) をのれ(おのれ) をはす(おはす) をぼす(おぼす) おめ
く(をめく) をもらせ(おもらせ) をよぶ(及ぶ)(およぶ) ころおひ(頃ほひ) さはぐ(さわぐ)
すへ(据ゑ)(すゑ) たをれ(たふれ) たえず(堪へず) とおう(遠う)(とほう) なをす(直す)(な
はす) まいる(まゐる) もちひ・もちい(もちゐ) つるに(つひに) ゆへ(故)(ゆゑ) ゆわゐ
(祝)(いはひ) イ音便を「ひ」としたもの(い)(例) すひたり(すいたり) ウ音便を「ふ」とした
もの(う)(例) さうなふ(さうなう)
などの類。

一、おどり字(々・ム・／＼)の類はすべて普通の文字に改めた。例へば黒々(黒黒) かゝり(かかり)
ゆめ／＼(ゆめゆめ)。

一、促音便と思はれる箇所には多くの場合「つ」を記してゐないが、二種の「葉子十行本」を参照して「つ」
を加へた。しかし「奉る」が「て」「たり」「し」につづく形のやうなものは、「葉子十行本」も促音を記
してゐないし、その發音は「奉^{たふ}つて」「奉^{たふ}つたり」「奉^{たふ}つし」ではなかつたと考へられるので、いま「奉^{たふ}
て」「奉^{たふ}たり」「奉^{たふ}し」と表記した。また「仕^{つか}つたる」も同様に「仕^{つか}たる」といふ形に表記した。

一、本文中には漢文書きの部分がある。さうした部分は普通の書き下し文に改めた。例へば、

母にも不被知（母にも知られず） 人の跡を可留世とも（人の跡を世に留むべしとも） 頻に雖致諫（頻りに諫めを致すと雖も）

一、平曲において読みものと呼ばれる、牒狀・勸進帳のやうなものは、底本においては漢文書きであるが書き下し文に改めた。

二、頭注はその語句の最初に出てゐる箇所で註したが、以後同一の語句のあらはれた場合にも、讀者を考へて、適宜重複を憚らず註すことにした場合も多い。ただし、固有名詞は重複して記さず、「前出」の註記をしたものが多い。

平家物語

平家物語卷第十

頸渡

へ一平家に縁故のあつた人人は、自分の身近な人人がどんな悲しい姿を見ることにならうかと、嘆き悲しみあはれた。
(二)京都市右京區嵯峨、大澤池の西。もと嵯峨天皇の離宮。

へ三維盛にちがひあるまい。

頸渡 (卷第十)

壽永三年二月七日、攝津國一の谷にてうたれし平氏の頸共、十二日に都へ入る。平家にむすぼほれたる人人は、我が方さまにいかなる憂き目を見んずらんと、なげきあひ悲しみあへり。中にも大覺寺にかくれ居給へる小松三位中將維盛卿の北の方、殊更おぼつかなく思はれるに、今度一の谷にて、一門の人人残り少う討たれ給ひ、三位中將といふ公卿一人、生捕りにせられて、のぼるなりと聞き給ひ、「此の人はなれじものを」とて、ひきかづきてぞ臥し給ふ。或女房の出で来て申しけるは、「三位中將殿と申

(四) こちらの三位中將維盛さまのことではございせん。

(五) 本三位中將重衡殿のことです。近衛中將は定員四人、從四位下相當官で、三位になつた場合は、これを三位中將といふ。この時維盛・重衡が三位中將であつたが、重衡は古參者であり、本三位中將と呼ばれた。

(六) 源仲頼。文德源氏。後白河院北面。檢非違使五位尉であつた。

(七) 「略解」に「西洞院」の誤りとする。近衛南・西洞院の西に左獄があつた。

(八) この當時關官。攝政基通をさすか。(九) 左大臣藤原經宗、右大臣藤原兼實。

(一〇) 藤原實定。前出(卷一「鹿谷」)。(一一) 藤原氏中山流。忠宗の子。花山院忠雅の弟。「山槐記」の著者。

(一二) 大臣公卿をいふ。

(一三) 安徳天皇の御代。

(一四) 外戚にあたる臣。戚里は漢の都長安城中の地で、高祖の姻戚の者が住んでゐた所。「史記」萬石君傳に見える。

(一五) 「あなたがち」は下に否定を伴つて、強い否定となる。決して御許可あるべきではありません。

(一六) 「いさみ」は氣を引き立てること。氣力の奮ひ立つこと。なんのはげみがある氣にはなれませうか。退治すへ七餘儀なく。

すは、^(四)この御事にてはさぶらはず。本三位中將殿の御事なり」と申しければ、「さては頸共の中にこそあるらめ」とて、猶心やすうも思ひ給はず。同じき十三日、大夫判官仲頼、六條河原に出で向かつて頸どもうける。^(五)東洞院の大路を、北へ渡して、獄門の木にかけるべき由、蒲冠者範頼・九郎冠者義經奏聞す。法皇、此の條いかがあるべからんとおぼしめしわづらひて、太政大臣・左右の大臣・内大臣・堀河大納言忠親卿に仰せあはせらる。五人の公卿申されけるは、「昔より卿相の位にのぼる者の頸、大路を渡さる事先例なし。就中此の輩は、先帝の御時、戚里の臣として、久しく朝家につかうまつる。範頼・義經が申狀、あなたがち御許可あるべからず」と各一同に申されければ、渡さるまじきにてありけるを、範頼・義經重ねて奏聞しけるは、「保元の昔を思へば、祖父爲義があた、平治の古を案ずれば、父義朝がかたきなり。君の御憤りを休め奉り、父祖の恥をきよめんがために、命を捨てて朝敵をほろぼす。今度平氏の頸共、大路を渡されずは、自今以後、なんのいさみあつてか、凶賊をしりぞけんや」と、兩人頻りにうつたへ申す間、法皇力及ばせ給はで、遂に渡されけ

△宮廷で袖を連ねて、同輩としてお仕へしてゐた昔は。

△齋藤實盛の猶子となつた。

○氣がかりなので、卑しい者の姿をして見に行つたが。

○他人の目について怪しまれることが怖ろしくて。

○平師盛。維盛の弟。前出（卷七「維盛都落」）。

○「それ」「そこ」「なにがし」などに續き、だれそれ、どこそこ、何何などの意。具體的に名を擧げて示す所を省略した形。前出（卷二「祝言」）。

○どれも他人事とは思へませぬ。

△嚴格別事情によく通じてゐる者。

△資盛。維盛の弟。前出（卷一「殿下騎合」）。

り。見る人、幾千萬といふ數を知らず。帝闕に袖をつらねし古は、怖ぢ恐るる輩多かりき。巷に頭を渡さるる今は、あはれみ悲しまずといふ事なし。

小松三位中將維盛卿の若君、六代御前につき奉る齋藤五・齋藤六、餘りのおぼつかなさ、様をやつして見ければ、頸共は見知り奉たれども、三位中將殿の御頸は見え給はず。されども餘りに悲しくて、つつむに堪へぬ涙のみしげかりければ、よその人目も恐ろしさに、急ぎ大覺寺へぞ参りける。北の方「さていかにやいかに」と問ひ給へば、「小松殿の君達には、備中守殿の御頸ばかりこそ見えさせ給ひ候ひつれ。其の外はそんぢやう其の頸、その御頸」と申しければ、「いづれも人の上とも覺えず」とて、涙にむせび給ひけり。ややあつて、齋藤五涙を押さへて申しけるは、「此の一兩年は隠れ居候うて、人にもいたく見知られ候はず。今しばらくも見参らすべう候ひつれども、よにくはしう案内知り参らせたる者の申し候ひつるは、『小松殿の君達は、今度の合戦には、播磨と丹波の境で候ふなる三草の山を固めさせ給ひて候ひけるが、九郎義經に破られて、新三位中將殿・

（二七）有盛。維盛・資盛の弟。前出（卷六「須俣合戦」）。

（二八）忠房。維盛・資盛・有盛・師盛の弟。前出（卷七「維盛都落」）。

（二九）備中守師盛。

（三〇）重い御病氣ということ。

（三一）誰が手厚く看病してさしあげませう。看病する者はない。

（三二）同じ思ひ。北の方とお互ひに通ひあふ心。

（三三）生きながらへてゐるとはよもや思つてゐまい。

小松少將殿・丹後侍從殿は播磨の高砂より御舟にめして、讃岐の八嶋へ渡らせ給ひて候ふなり。何としてはなれさせ給ひて候ひけるやらん、御兄弟の御中には、備中守殿ばかり一の谷にて討たれさせ給ひて候」と申す者にこそあひて候ひつれ。『さて小松三位中將殿の御事はいかに』と問ひ候ひつれば、『それはいくさ以前より大事の御いたはりとして、八嶋に御渡り候ふ間、この度は向かはせ給ひ候はず』とこまごまところ申し候ひつれ」と申しければ、『それも我らが事を餘りに思ひなげき給ふが病となりたるにこそ。風の吹く日は、けふもや舟に乗り給ふらんと肝を消し、いくさいふ時は、只今もや討たれ給ふらんと心を盡くす。ましてさやうのいたはりなんども、誰か心やすうもあつかひ奉るべき。くはしう聞かばや』と宣へば、若君・姫君など、『なんの御いたはりとは問はざりけるぞ』と宣ひけるこそ哀れなれ。

三位中將もかよふ心なれば、『都にいかにおぼつかなく思ふらん。頸共の中には無くとも、水におぼれても死に、矢にあたつても失せぬらん。この世にある者とはよも思はじ。露の命の未だながらへたと知らせ奉らば

（四）私ひとりならばとにかく、あなたにとつて、さうすることが氣の毒で。

（五）いつ逢へるともわからぬから、この手紙を形見とおもつてくれの意。藻鹽草を「掻く」と手紙を「書く」とにかけた。跡は手跡。

（六）若君姫君へ同じ文面で。

（七）底本「若君」「若公」とあり混用する。
（八）底本「御」を缺く。「沼本」によつて改める。

や」とて、侍一人したてて、都へのぼせられけり。三つの文をぞ書かれける。まづ北の方への御文には、「都には敵みちみちて、御身一つの置き所だにあらじに、をさなき者共引き具して、いかに悲しう思すらん。これへむかへ奉て、一所でいかにもならばやとは思へども、我が身こそあらめ、御ため心ぐるしくて」などこまごまと書きつづけ、おくに一首の哥ぞありける。

（三五）いづくともしらぬあふせの藻鹽草かきおく跡をかたみともみよ

をさなき人人の御もとへは、「つれづれをばいかにしてかなぐさみ給ふらん。急ぎ迎へとらんずるぞ」と、言葉もかはらず書いてのぼせられけり。此の御文共を賜はつて、使都へのぼり、北の方に御文参らせたりければ、今更又なげき悲しみ給ひけり。使四五日候ひて、暇申す。北の方泣く泣く御返事書き給ふ。若公、姫君、筆をそめて、「さて父御前の御返事はなにと申すべきやらん」と問ひ給へば、「ただともかうも、わ御前たちの思はんやうに申すべし」とこそ宣ひけれ。「などや今まで迎へさせ給はぬぞ。餘りに戀ひしく思ひ参らせ候ふに、とくとく迎へさせ給へ」と同じ言

（三）悲しさに堪へられぬやうにお見えになつた。
 （四）今となつてはこの汚れた現世を捨てようにも、進んでさうした氣持になれない。
 （五）現世における親子・夫婦の愛着のきづな。「閻浮」は閻浮提の略。佛教で人間世界をいふ。

（一）綱代車の車箱に小さな八葉蓮花の紋を描いたもの。大八葉に對す。小八葉は四位・五位・雲客、僧中の有職非職らが用ゐた。
 （二）車の左右兩側にある小窓。
 （三）やや黒みがかつた黄赤色の衣の地。
 （四）鎧の小手・脇當（すねあて）・脇楯を着けたのをいふ。
 （五）こんなことにおなりになるとは、おかはいさうに。
 （六）父清盛。
 （七）母二位尼。
 （八）お氣に入りの息子であられたので。
 「ましましいし」は「ましましし」のイ音便。

葉にぞ書かれたる。此の御文共を賜はつて、使八嶋にかへり参る。三位中將、まづをさなき人人の御文を御覽じてこそ、いよいよせんかたなげには見えられけれ。「抑これより穢土を厭ふにいさみなし。閻浮愛執の綱つよければ、淨土をねがふも物憂し。ただこれより山傳ひに都へのぼつて、戀ひしき者共を、今一度見もし、見えての後自害をせんにはしかじ」とぞ、泣く泣く語り給ひける。

内裡女房

同じき十四日、生捕り本三位中將重衡卿、六條を東へ渡されけり。小八葉の車に、先後の簾をあげ、左右の物見をひらく。土肥次郎實平、木蘭地の直垂に小具足ばかりして、隨兵卅餘騎、車の先後打ち圍んで、守護し奉る。京中の貴賤是を見て、「あないとはし、いかなる罪のむくいぞや。いくらもまします君達の中に、かくなり給ふ事よ。入道殿にも、二位殿にも、おぼえの御子にてましましいしかば、御一家の人人も、おもき事に思ひ